

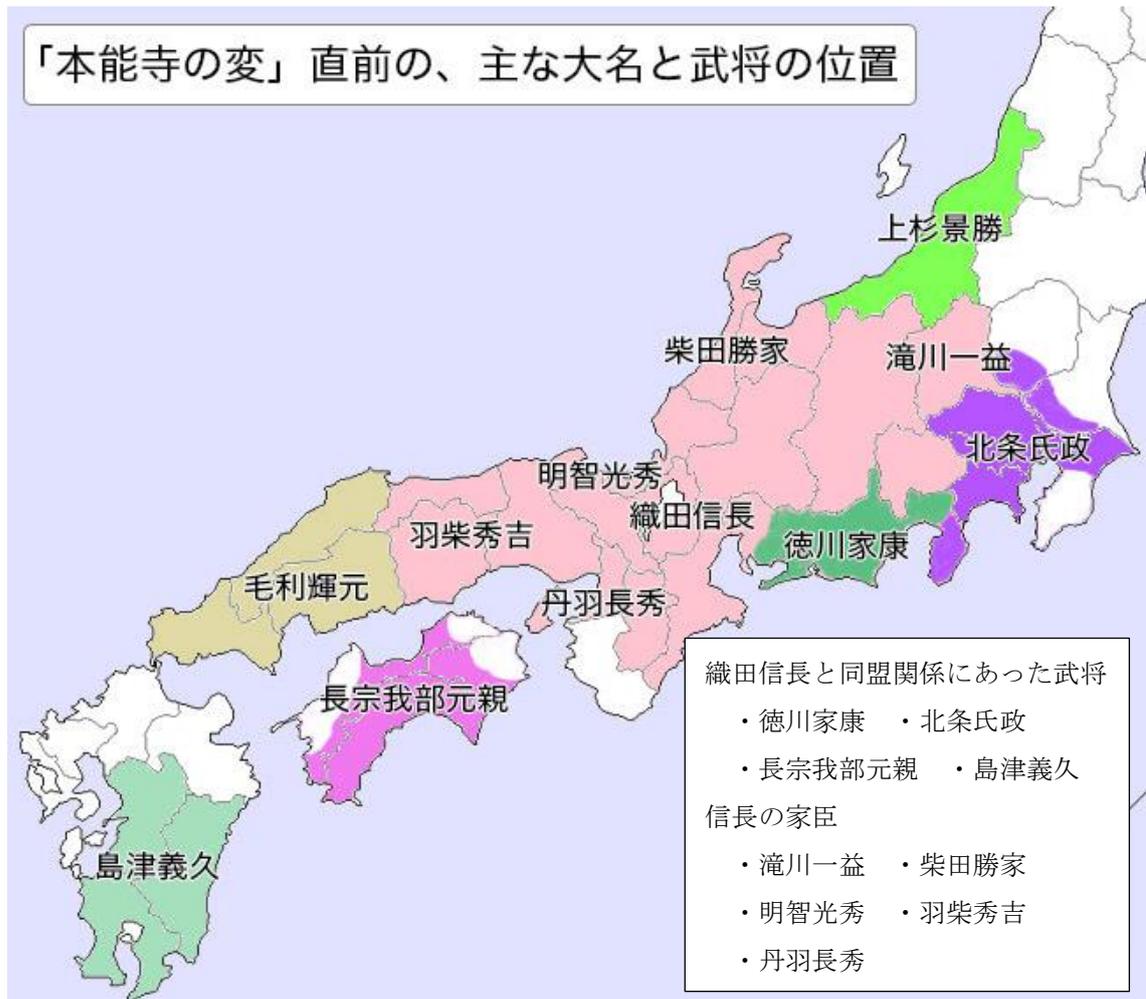
本能寺の変 その5

長谷川 周三(瑞浪高校 1970 年卒)

2021 年 10 月

今回は信長が甲州征伐の勝利を祝う戦勝祝賀会において、明智光秀の発言に言いがかりをつけて大勢の家臣の前で折檻し、また甲府では近衛前久や明智光秀の必死の命乞いにも拘らず、正親町天皇も尊敬し慕われている快川紹喜大僧正を焼死させたことで、前久や光秀の忠誠心に翳りが見え始めたところまでお話ししました。

さて、今回は、近衛前久が本能寺の変に向けての策略と、信長が武田勝頼の首実検をした時の心境を中心に、お話ししたいと思います。



近衛前久の屈辱と決意

天正10年4月10日、信長は甲斐、駿河、上野（群馬県）、信濃などの戦後処理を済ませて、いよいよ甲府を立て安土へ帰ることになりました。

信長は甲州征伐の戦勝祝賀会を催した上諏訪の法華寺に到着した際、徳川家康に「安土へは富士山を見ながら徳川殿の新しい領地を通して帰りたい、案内致せ」と申し付けていました。

そこで、甲州征伐で活躍した金森長近、森長可（もりながよし）、滝川一益、河尻秀隆や、信長が安土から連れて来た丹羽長秀や堀秀政、小姓、馬廻りなど5万の兵たちには、戦勝祝賀会の後それぞれの居城や安土に帰えるよう命じ、徳川領視察には、明智光秀とその組下大名である細川忠興、筒井順慶、高山右近、中川清秀、小姓の森蘭丸や馬廻りなどおよそ千人の兵士を同行させることにしました。

そして近衛前久ら朝廷の公家衆については、すでに役目を終えたということで、この先は別行動をとるようにと、森蘭丸を通じて伝えてありました。

出発当日の朝、森蘭丸から信長の伝言を聞いた近衛前久は、予期せぬ事態に驚きました。まさか、ここで信長、光秀らと別れるとは思ってもいなかったからです。

前久にはこの先暫らくは信長と同行して、信長の動や、光秀との主従関係を観察して、信長殺害に繋がるヒントを見つけたいと思っていました。

早速信長のいる本陣前の大手門に駆け寄り、願い出ます。

信長はすでに軍団の最前列で馬の背に跨り、出発を待っているところでした。

前久が近づくと信長は無愛想な表情で「何か用か」と語尾を強めて尋ねました。

前久は信長が馬から降りもせずに見下した横柄な物言いに、やや苛立ちを覚えました。気を静めて「信長殿、前久も富士を見て、東海道で京に戻りとうございます。どうかご同行をお許し下され」と懇願しました。

しかし信長は、さらに居丈高な態度で「近衛、そなたなどは、木曾路を回って帰られたがよかろう。華々しく凱旋する兵と共に東海道を歩くのはおかしかろうに。木曾路に行くのじゃ、木曾路を」と厳しい口調で言い捨て、馬に鞭打ち富士山に向けて立ち去りました。

その場に取り残された前久の怒りは、収まりません。

同行の願いを断られ、しかも馬上から暴言を浴びせられた屈辱は許しがたいものでした。

以前の信長は、天皇や朝廷の官職に面会する際には礼儀、作法は勿論のこと、言葉遣いまでも丁寧にして敬意を払っていました。

勿論、前久に対しても同様の振舞いをしていましたが、戦勝祝勝会以降は全くの変わりようです。

先日、恵林寺の快川僧正を焼き殺した一件でも、快川僧正は正親町天皇が最も尊敬している国師と知りながら容赦なく殺害しました。

全くもって天皇や朝廷を馬鹿にした行為です。

それと今年の正月、安土城に招かれた時に信長が案内してくれた「御幸の間」は、天皇

が安土城に行幸された際の御殿だということでしたが、信長の住まいの天守閣と比較すると全くもって見劣りするものでした。

その天守閣は、当時の最高峰の技術と芸術で作りに上げられた和洋折衷の煌びやかな建造物で、ポルトガルやスペインの宣教師たちがこれを見て、本国の宮殿にもこれほど豪華な装飾を施した部屋は無いと言っていたほどです。

また、心底許せなかったのは、天皇の御殿を信長の住居から見下ろす位置に作ったことです。まさに信長が天皇を超えた存在になろうとする魂胆が、はっきりした証拠です。

このまま信長に思い通りの独裁政治を続けさせれば、たとえ天皇や朝廷、家臣であっても、信長の政策に異を唱えたり、意見したりすれば、どこか遠方に追放されるか下手をすれば殺されかねません。

前久は「信長の殺害には一刻の猶予は許されない」という思いを胸に秘め、中山道を急ぎ京へ向かいました。

本能寺の変へプロローグ

前久は長い道中駿馬に鞭を入れながら、信長を何とかして警備の厳重な安土城から誘（おび）き出して、警護が手薄になる状況を作ることが出来ないか考えました。

信長が京に出てくる時はいつも無防備な状態で、安土城から馬を飛ばしてやってきます。

それは安土から京までは光秀の居城である坂本城の守備範囲ですので、敢えて信長が強固な軍勢を連れて身を守る必要が無いからです。

また京には治安維持のための所司代を置いて天皇や朝廷などを守っていましたので、安土から連れていく手勢はせいぜい 100 人程度で済むわけです。

信長を京に誘き出せさえすれば、何とか殺害することが出来るのではないかと前久は考えました。

では、どんな方法があるのか。

日頃から信長が欲しくてたまらない茶入れの陶器「檜柴肩衝（ならしばかたつき）」を持つ九州博多の島井宗室を京に招いて、信長にその茶入れを使った茶会を開催すると言って誘いだす。

「檜柴肩衝」は天下三大茶入れの一つで、他の二つ（「初花肩衝」「新田肩衝」）はすでに信長が持っていたので、残る「檜柴肩衝」を島井宗室から譲り受ける絶好のチャンスを作ってやることになるのです。

次に考えられるのは、今回の甲州征伐の恩賞として天皇から信長に三職推任（注 1 を要請してもらい、信長を御所に参内させて天皇に直接望みの官位を上奏させるように仕向ければ、京に来ざるを得ません。

しかし、信長が「島井宗室を安土城に呼んで茶会を開け」とか、「官位はいらぬ」と断ってきたら、安土城から京に誘き出すことは出来ません。

では、その他に何が良い方法があるのか。

今回の甲州征伐のように信長が敵地に遠征するとなれば、確実に安土城から出ることに
なります。そうした状況を作って、出発前に何とか京に立ち寄るよう仕向ければ、上手く
いくかも知れません。

現在織田軍が戦闘中で、信長が確実に出陣する戦地はどこか。

それは、もっか信長の最強の敵である毛利の戦場です。

何とか秀吉に頼んで、信長を戦地に出向かせよう。

そして、信長を殺すのは、戦勝祝賀会で信長に折檻された光秀をおいて他にはいない。

そんな思考を繰り返すうちに、京に戻ってきました。

信長の心根

さて、信長一行は、どんな旅をしているのでしょうか。

甲府を立てて2日目の朝、本栖湖の空は雲一つない晴天に恵まれ、富士山が見事な雄姿
を見せていました。

家康の心配りが行き届き、行く先々には立派な休憩所や宿泊所が設けられ、沿道から集
められた酒や山海の珍味がふんだんに振舞われていました。

また、街道を進めば、行軍しやすいように拡幅され、邪魔な石やごみなどは一切なく
兵士の持つ槍や鉄砲が周囲の木々に当たらずよう切り払われていました。

家康の心のこもった接待に、信長を始め連れだった武将や兵たち一同大いに満足し、物
見遊山をしているような面持ちで行軍は続きました。

信長はのんびりと馬の背に揺られながら、武田勝頼の首実験をした時のことや、戦勝祝
いをした上諏訪「法華寺」までに決意したことなどを、振り返っていました。

————— 次からは、信長が生涯に亘り身内にも家臣にも明かさなかった心境を、
信長の言葉で語った件（くだり）です。 —————

『儂（わし）は勝頼の首実験をした時、何故か思わず「戦国の世で高い評価を受けて来た
大将でも、運が尽きればこんな姿になってしまうのか」と口にして、人生の虚しさと無常
さを感じた。

信玄公が存命のころは戦国一の最強軍団と言われてきたが、跡目を継いだ勝頼は、穴山
梅雪や木曾義昌らの裏切りもあってこのあり様、とても他人事とは思えなかった。

儂は今川義元を破って以来幾多の戦いを勝ち抜いて、今や天下統一まであと一歩のとこ
ろまで漕ぎ着けた。

しかし、儂が死んだ後、嫡男信忠ら子孫たちがかつての中国漢王朝のように 400 年にも
及ぶ覇権を維持し続けられるかどうか、心配だ。

49 歳になった今、残こされた人生はさほど長くない。

今、出来ることは全て遣っておかないと、悔いが残る。

その為には、この先織田家を脅かす者をこの国から排除して、全ての領土を儂の子供達

や親類縁者、或いは最も信頼できる家臣に占領させることだ。

天下統一は毛利、上杉を滅ぼして、九州を平定すればほぼ完了する。

そうなれば、織田家を脅かす敵は、日本を植民地にしようとしているポルトガルやスペインの南蛮人と、織田家に従属してきた武将達や有能な家臣達だ。

農がスペイン王国から派遣されて来た宣教師ヴァリニャーノに会った時、彼はスペインの国王が日本を植民地にするために 60 隻の大型軍船で、3 万を超える兵士を送り込む構想を持っていると言っていた。

もし言葉どおりにスペイン軍が攻めてきたら、その 10 倍以上の兵を動員して迎え撃たねばならぬ。

そしてその軍隊を指揮して戦いに挑むのは、今すぐにでも 30 万もの兵を結集し、勝利出来る力量を持つ国の最高権力者でなくてはならない。

今の日本には天皇がいて、また名だけの將軍足利義昭がいるが、いずれもそんな力も能力も持っていない。

それが出来るのは、農をおいて誰がいる。

ここらで天皇や將軍の持つ権力全てを織田家に移譲させ、織田王国を築いて農が国王になり、南蛮人から日本を守るしか方法は無いだろう。

今の日本には 50 万丁を超える鉄砲や 1,000 門を超える大砲ある。

農が国王となって日本中から屈強な兵士を 50 万人ほど集め、鉄砲隊、騎馬隊、槍・弓隊を組織して日々鍛錬し、天下無双の軍事集団を作り上げる。

そしてポルトガルやスペインの宣教師に馬揃え（注 2）を催して軍事能力を観閲させる。

その壮大で威圧感溢れる隊列を見せれば、さすがの宣教師たちも日本に戦いを挑んでも勝ち目はないと、自らの国王に進言するだろう。

こうしておけば、以前からポルトガルに建造を頼んでおいた大型軍用船で中国大陸の唐に進出し、思う存分侵略して日本の植民地にする。

そこで得た土地は、いずれ光秀、秀吉ら家臣と従属してきた武将達に分け与えてやる事が出来る。

そうすれば、日本の領土は子息や親戚縁者などで独占出来るはずだ。

.....

その次に織田家を脅かす者と言え、織田家と同盟関係にある武将や、有能な家臣だ。

今最も気がかりな人物は、何といても北条氏政と穴山梅雪。

氏政は、農が甲州征伐をする前に武田勝頼の家臣真田幸昌との戦いで上野の国（群馬県）を奪われた。それを奪還したいがために、家康を通じて織田と同盟を結んだ。

しかし甲州征伐が終わった後、農は上野の国を敢えて家臣の滝川一益に与えた。

何故ならば、氏政は甲州征伐の時、農の命令に従わず勝手に武田領を攻め、織田軍に加わらなかったからだ。

氏政は、織田と同盟さえ結べば上野の国は取り戻せると考えていただろうが、今は悔や

んでいるだろう。

近いうちに必ず何かを仕掛けてくるに違いない。

早いうちに始末しないと、厄介なことになる。

また、梅雪は、勝頼とは従弟で武田家筆頭の重鎮だった。その者が主君を裏切った。

勝頼にとっては、さぞかし無念だったことだろう。

武田家の滅亡が迫ってくる中で、勝頼を裏切った理由が単なる命乞いだったとしたら、いつ儂を裏切るか分からない。

早いとこ始末すべきだ。



そしてその二人と好（よしみ）を通じているのが、徳川家康だ。

儂が死ねば、氏政、梅雪、家康が同盟を結んで織田家に刃を向ける可能性は十分ある。

そもそも織田家と徳川家は祖父の代から敵対関係にあった。

家康の祖父松平清康や父の松平広忠は、儂の父信秀の策謀によりそれぞれの家臣に惨殺されている。また、織田・徳川同盟以後も、家康の伯父水野信元や嫡男信康が武田家と内通しているという理由で、儂が家康に命じて、二人を死に追いやった。

家康は普段は口数が少なく律儀で儂の命には素直に従い忠誠を尽くしているように見えるが、腹の底は分からない。

父や子までも織田家に殺されたわけだから、恨みが無いわけではない。

いっそのこと、家康、氏政、梅雪を纏めて殺害しておけば、後顧の憂いは無くなる。

今回の甲州征伐に明智光秀や筒井順慶などを同行させたのは、北条氏政の領内の城郭や、地形、川幅や浅瀬、橋の架設状況などを下調べさせ、近いうちに光秀や順慶らに氏政を討たせる為だった。

しかし、家康、氏政、梅雪を纏めて滅ぼすとなれば、先に家康や梅雪の領内を見ておく必要がある。

そこで、上諏訪の法華寺に到着した日に、家康に「安土への帰りは、お主の領内を視察するから案内してくれ」と申し付けておいた。

そこで思い悩んだのは、誰にそれを実行させるかだ。

羽柴秀吉か柴田勝家か明智光秀か。

秀吉は毛利と、勝家は上杉と戦闘状態にある。今家康を殺せるのは光秀しかいない。

しかし、光秀に家康殺しを命ずれば、恐らく承知しないだろう。

儂が越前朝倉義景の居城金ヶ崎城を攻めた時、浅井長政の裏切りで挟み撃ちになり、生きるか死ぬかの思いで朽木街道を京へ向けて逃げ帰ったことがあった。

その戦いの殿（しんがり）を務めてくれたのは、光秀、家康、秀吉だった。

この時、この三人は総力を結集して朝倉軍と戦い、命からがら撤退してきた。

それ以来、光秀、家康の結束は強く、今でも互いに助け合いながらこの厳しい乱世を生きている。

儂が家臣の佐久間信盛を高野山に追放した際も、光秀と家康は二人して信盛の職務怠慢を公言し、19か条に及ぶ折檻状を儂に作らせて信盛に通告させたほどだった。

光秀に家康を殺させるのは本意ではないが、しかし、必ずやって貰わねばならない。

ここで気がかりになったことは、家康殺しを光秀に無理矢理命じたら、逆に二人が結託して儂に刃を突き付けてくることだ。

家康、氏政、梅雪に光秀が加われば、毛利や上杉とは比較にならないほどの強敵と戦うことになる。これだけは絶対に避けなければならない。

今一度、光秀の儂に対する忠誠心がどの程度のものなのかを十分試してみてからでないと、迂闊なことは出来ない。

そこで儂は光秀の忠誠心を試すために、戦勝祝賀会で光秀を折檻し、また、光秀が甲府の恵林寺住職快川紹喜（かいせんじょうき）の命乞いをしたにも拘らず、それを無視して焼死させた。

光秀には気の毒な事をしたが、この非道な儂の行いに光秀は腹も立てずじっと耐え、今もって平静を装っている。

光秀の儂に対する忠義心は本物なのか、本当に信用していい男なのか。

安土に帰ったら、家康殺しを光秀に話してみよう。

光秀はどんな反応を見せるのか。・・・・・・・・・・』

この後、信長は光秀に家康殺しを命ずることになりますが、そのことで信長は自分自身の寿命を縮める結果になっていきます。

これから先は次回にお話ししますが、本能寺の変は、光秀の信長に対する怨恨（えんこん）が動機との説もありますが、そんな単純なものではなさそうです。

今回は、天正10年（1582年）6月2日の本能寺の変までの、信長、前久、光秀らの動きや心理状態をお話ししていきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

（注1）三職推任とは、信長に関白、太政大臣、征夷大將軍のいずれかの官位を選択させ授与すること。

（注2）馬揃えとは現代で言う軍事パレード。